

埋もれた婦人運動家(5)『婦人戦線』の人々



昭和五年、アナキストの女流たちが発刊した『婦人戦線』のスローガンは「強権否定 男性清算 女性新生」であり、光はわれわれから、という気概に溢れていた

城じょう

夏なつ

子こ

(作家)

無政府を覗く

大杉好子

私があの一とを愛する

あの一とが世の中から不逞の徒と罵られる

人であろうと

それが私に何程のことだろう

(不逞の世の中から悪罵されることは私た

ち正しいもののみの誇りだ)

不逞なあの一とを恐れて、私の弱い可哀想

なかあさんが、どんなに私に泣きついた

とて、そして私が苦い涙を川ほど流した

とて、それで結局私の心に何の変りがあ

るう

其の外のどんな圧迫が、私の決心をとりひ

しくと言うのだろう

私はいのちを賭した恋から

ともにアナキーをのぞいたのだ

右は、昭和六年六月号の『婦人戦線』の巻頭に掲げられた詩である。思い出す。この大杉好子とは誰だか、『婦人戦線』同人の誰も知らなかった。この号から私が編集を引き受けたので、投稿して来た作品を私が選んだ。大杉などという曰くありげな姓に小首を傾けたことや、文字が稚拙ながら丁寧だったことなど、今思い出す。彼女はまた、こんなことも書き添えて来た。無政府主義、それは、無学な私たちに決して解らないくちむつかしいものではなくて、何処にでもあるものでしょう。只、私たちは注意してそれを発見

しさえすればいいでしょう。そしてそれを拡大してゆきさせれば——Vと。

『婦人戦線』という無政府主義同人雑誌の名は、本誌五月号秋山清氏の「八木秋子」の中に登場している。が、今はこの雑誌の存在し



昭和5年『婦人戦線』の人々。前列右から二人目は平塚らいちよう

たことを知る人も殆ど無いであろう。

女性だけによって、昭和三年夏、当時のマ

スコミにやんやと騒がれて誕生した『女人芸

術』の名も、同様に、今の六十代の人々の記

憶に僅かに残るに過ぎないと思う。とにかく

『女人芸術』と言いつつ、『婦人戦線』といい、当

時のウーマン・リヴとして激しく真剣な女の

闘いであった。

『婦人戦線』は、詩人高群逸枝を囲む十人ば

かりの女性たちによって生まれた、たかだか

六十頁ばかりの無政府主義機関誌である。そ

の高群逸枝とは

汝 洪水の上に坐す

神エホバ

われ 日月の上に坐す 詩人逸枝

と、誇りも高く名乗り出て(大正末期)、島

田清次郎と共に、一世を驚愕させた女詩人だ

ある。日本のサツフォであった。『女人芸術』

の方は、創刊当初から神近市子を編集顧問と

した程で、新しい時代の波を意識して編集さ

れてはいたが、女流新人へ舞台提供という主

旨がその本来の目的であった。昭和四年、五

年と、世の中が次第にマルクス旋風に吹きま

くられてゆくと、主宰者である長谷川時雨も、

全くその波に吞まれてしまったようであると言

うより、多分に夫の三上於菟吉の影響によっ

てだと、当時彼女の身辺について仕事を手伝っ

ていた私は観察する、同誌は奇妙な左翼態

勢をとっていった。一部の人は、時雨女

史は赤い白粉をつけすぎると、陸口をきいた

ものである。奇妙な、と言ったのは、長谷川

時雨自身、決して革命社会の到来なんか信じ

てはいなかった。意地悪く言うならば、

無意識な知的虚栄の現われでしかなかったの

である。あたしは決して時代の波にとり残さ

れてなんかいませんと、天下に叫びたかった

のである。三上於菟吉は大衆作家というレッ

テルを貼られてはいたが、妻の時雨が考えて

いるように日本のドストイェフスキーとまで

はゆかずとも(ある日時雨夫人は私に三上氏

はドストイェフスキーにも匹敵すべき作家で

すと、厳しい表情で、声を低めて言った、

思想的な何かを持った人であった。だからと

言って、あの頃の時雨の反体制的外見は、結

局「亭主の好きな赤烏帽子」だったときめつ

けるのは、いささか失礼であろう。天性があ

まのじゃくで、日常生活の上でも娘時代から

とかく因襲に抗しつづけて来たひとだから、

国の政治や時代思潮に対しても、すらりとそれを受け入れる準備はちゃんと出来ていたのである。

『婦人戦線』誕生まで

さて、「無産婦人芸術連盟」という、無政府主義の旗印の下に、雑誌『婦人戦線』の誕生したのは、皮肉なことに、号を逐って左傾の色濃くなっていた『女人芸術』誌上の、アナ・ボル論争がきっかけであったと言えるだろう。

ごく大ざっぱに言えば、マルキストたち、ボルシェヴィキたちの革命理論は、至極現実的で散文精神を以てし、アナキストは、もっと高邁な夢を描いて、詩精神を以て反論する、という共に無産階級解放のための論争であった。アナキスト側からは、高群逸枝、望月百合子、八木秋子、松本正枝、の諸氏が誌面を賑わし、論争の形となる以前、既に『女人芸術』創刊号に、望月百合子は「婦人解放の道」を書き、四号には「強権か自由か」で、マルキシズムを批判している。私などもこの望月論に賛成だった。同じプロレタリア運動なら、アナキズムの方がわが肌

あうと感じた。

傑れた女流作家、評論家を育てようという最初の意金は、次第に揺らぎ、現実的な散文精神で押しまくるボルシェヴィキの一派は、主宰者長谷川時雨のあの古典的な美貌に追手勝手から、赤いおしろいを塗りたくってしまつたのである。

『婦人戦線』が、高群逸枝を中心に、望月百合子、松本正枝、住井すゑ、伊福部敦子、白石清子、宮山房子、鎌田貞子、八木秋子、神谷静子、城しづか等を仲間として創刊されたのは、高群逸枝とその強力な後援者であり夫であった橋本意三とが、『女人芸術』誌上のアナ・ボル論争に刺戟されたであろうことは、否めない。しかし、その二年以前既に、アナ系婦人たちによって、農民婦人組合運動が起され（米を作る者に米を食べさせよに始まる運動）、又、大杉栄の妹あやめ、中村しづ子、川口春江、望月百合子、高群逸枝、秋月静子らが、アナ系婦人思想団体を持つ準備会を、本郷の労働運動社で開いている。「会員個人の絶対自由を尊重し、個人の自由な連合団体にする」という主旨が、マルキシズムとかつきり区別されている。この団体運動がど

のように展開されたかは、今調べることが出来ないが、かかる集団が母胎となつて、やがて五年三月の『婦人戦線』創刊となつたのだつたと思う。

『婦人戦線』の発刊は、『女人芸術』発刊当時とは、比ぶべくもない地味な出発だったが、地に潜んで何かを叫びたい思いに、胸をふくらませていた人々が、次々と参加した。名もない投書家もいれば、竹内てるよ、碧静江、野村芳子などの、既に世に認められていた詩人もはせ参じた。アナキストは詩精神と言つたが、後に一流の詩人と讃えられた人は、両手の指で数え切れない。

みんな、からだの芯から燃えていたのだ。一人の指導者に左向け左で、草木のようになびいたりしなかった。男も女も。

ここに望月百合子「メーデーの記」がある。一部を抜粋しよう。

——今年のメーデーこそは、ただのメーデーで終らせるな、葬式行列で終らせるな。俺達の力を示さねばならんぞ！

こうした言葉に誘われて、私は芝の集合地にかけてつけた。そこには既に、吾々の逞ましい同志に守られて、幾条もの黒旗が空

にたなびいていた。会場をどよもすメーデー歌、旋風の如く、怒濤の如く、渦巻く黒い労働大衆の群れ、それは黎明の鐘でなく何であらう。

——帽子を振って、肉体全体を振って、顔一杯に開いた口から迸り出る演説は、一分も続かないうちに中止だ。中止でないのはダラ幹の長口舌、大衆はこれを、「ひっこめダラ幹」の罵声を以て掩う。

——赤旗の下には多くのダラ幹がいて、無産大衆を欺瞞し、官権と結んで、この労働者の日をして、只単なるお祭り日として、事なかれに終らしめるとき。併し我等の黒旗下には、幹部というものは無い。会場へ入る時、官大は吾等の黒旗の処へ来て、「おい、幹部を先頭に二列に並べ」と言った。「俺達みんなが幹部だぞ」怒ら叫ばれた。「それじゃ組合の責任者だ」「俺たちみんなが責任者だぞ」官大はびくりした。「君達にや組合長ってものはないのか？」

「ばか、そんなものがあつてたまるかい、俺たちみんなが組合長で、みんなが平組合員だぞ」しかし官大にはアナキズムのこの平等観、連帯責任感ばかりようがない。

会場で既に多くの同志は、官大に拾い出されてトラックで持っていかれてしまった。人数が一人減れば、それだけ残った我々の力は倍加した：：

——カリエスと胸の疾患に悩む私は、幾度か落伍しそうに体の衰えを感じた。併し両方からガツチリ組んだ若い逞しい労働者の腕が、前のめりに突風のように私を引っぱってゆくのだ。私は力強い同志の腕に、意志に、熱い涙を以てひそかに感謝した。身体の弱い私は第一に強い健康を持たねばならない。貧しく生きるもの、正義を求める者、そういう人々は皆闘いに生きねばならない今日、体が弱いことは何よりの弱味だ。今や、筆で、弁舌で戦えばそれでよかった時代は、通りすぎていく……

この、昭和六年のメーデー風景と、現代の何百倍という数でこなすメーデーと、人はいずれにほんとの闘争精神を感じとるだろうか。

『婦人戦線』は当時のリヴ

非常に口惜しいことに、私はこの度のメーデーまでに『婦人戦線』の全部を探して読み返すことが出来なかつた。無産婦人芸術連盟の

人々は、ほんの数人しかその所在もわからない。物故した人々も大方である。肝心の創刊号から三冊までは、どういつ特集を組んだか知ることとは出来なかつた。が、四号、昭和五年六月号以下、月々にその赤と黒との二色刷りの表紙に大きく打ち出された文字の意味はたくましかった。「ブル男マル男を討つ」「都会否定」「性の処理」「女流乱弾」「無政府主義恋愛」「無政府主義道徳」。

松本正枝は、「ブル男マル男を討つ」号で、当時の大ベストセラー自伝小説『死線を越えて』の著者、賀川豊彦を、ブルジョア意識の持ち主でしかない論じ尽して、人々を驚かせた。何しろ神戸の貧民街に住んで、農民、労働者の慈父的存在とされてきたこのクリスチャンを、見事にやつけたのだから、松本正枝は生易しい頭脳の持ち主ではない。この号では、やはり当時のベストセラープロレタリア作家、貴司山浩が、住井すゑ、白石清子の二人から、叩かれている。

松本正枝は、アナキスト延島英一の夫人で、学究的な論文を次々と書き続けたが、特に性の問題に真剣に取り組んでいた。

「性生活の経済学的観察」「嫉妬の問題」「家

庭制度と性生活”、“妊娠の経済学”と、その考察も論説も、深遠、慎重、独自性を持つものが多かった。そのまま現代に通用する論旨である。

…家庭とは、要するに収入といふものを基礎とした性生活、収入に規制された性生活にすぎない。みよ、現代においては、収入なきものは性生活を営むことができないのである。故に現代においては、収入あるところに家庭は出現し、収入なきところに家庭は崩壊するといふことができる。このことはまたとつて直ちに、生産と消費の自由が万人に対して確保せられる社会においては、家庭の存在理由はないと推論することの基礎とすることも出来る。

終りにくりかへして云へば、家庭否定とは、性生活を営む両性を中心とし、子供を花とする団體生活の否定ではない。さういつた団體生活は、家庭が否定された時に最も完全に開花するのである。また家庭否定は、性關係の混乱無秩序を意味するものではない。家庭という制度が存在するが故にこそ性生活が往々にして否定され、性生活の混乱無秩序が行はれるのであることは、われわれが日々目前にみえている通りなのである。

私はこの意味において婦人運動としての家庭否定を、重要な意義を有するものと認識するのである。

る)の裏で、山羊飼っておつかさんを養つたのよ。あれでも孝行息子だったのよ、今、すつかり偉くなつちやつていい仕事してるじゃない。知らないの？ 今の秋山清よ。

その宮山房子は、同志大道寺三郎と結婚し、人の顔さえ見れば別れたい別れたいとぶつぶつ言いながら、やがて一男を生み、六年前に夫が病死するのをねんごろに看護して、つまり生涯無事に添い遂げたのである。今は戦時中から住みついた埼玉県吹上市で、ばりばりと地域活動をし、地元困っている人達の相談相手などにもなっている。雀百までである。別れる時彼女は言った。

「ねえ城さん、なんてつたつて、亭主を見送ることの出来たつてことは、女として満足なものよ。そして、後家ぐらしつてのがまた、素晴らしいわねえ、やりたい仕事とどんなやれるもの。働かない後家じゃ意味ないけどね」六十歳になつても、往年のアナキズム運動家は、イキのよいことであつた。まず、よき老いっぷりと言えよう。

同じことは八木秋子にも言える。八木秋子は東京都下の小さなアパートの、背の高い書架にぎっしりつまつた本たちより外、なんの

〔性生活の経済学的考察〕松本正枝
考えてみると『婦人戦線』に集まつた女性たちは、全く各人各様の個性を持っていた。今日「橋のない川」でその強靱な個性をあますところなく表現して成功している住井すゑは、当時から線の太い、少々のごとにビクともしない人だつた。一夕、読売講堂で『婦人戦線』の人たちによる講演会を持った時、堂堂たる体軀の住井すゑは乳児を抱いて壇に立ち、理路整然と説き去り説き来つて、満員の聴衆からやんやの声援を浴びた。この人と白石清子とはアナキストらしい詩精神より、ひどく現実派のようだつた。

住井すゑの容積の半分ぐらいなのが、ソルボンヌ大学で学んで帰つて来た、黒いつづらな瞳の望月百合子と、築地のお米やに生まれた若い宮山房子で、宮山房子は山椒のように小粒でピリリとし、姐御肌だつた。(ちよつとよけいなおしゃべりをする、望月百合子はなかなかの雄弁家で、パリで洗練されて来たシツクな断髪洋装や、いささかエキゾティツクな容貌や、少年っぽい肢体で、大上段にアナキズム理論を弁じたてるのが恐ろしくチャームイングだつた。対照的に連想されるのは、

裝飾もない簡素な部屋で、七十代半ばの日々を、元気に暮らしながら、近くの老年者たちのよい相談相手となつていようだ。そして血の滲む日本の暗い時代に得た体験を、厳しくふり返っている。彼女の筆はやがてわれわれに、大きな感動をびしりと活字にして、証明してくれるだろう。

最後に、この眼で見た『女人芸術』と『婦人戦線』の、たつた一つの、見逃してならない共通点を書きとめておきたいと思う。

初めに記したように、『女人芸術』の主筆者は長谷川時雨だが雑誌は、時雨ひとり力で誕生したのではなかつた。恰も夫の三上於菟吉との間に生まれた娘のようなもので、三上於菟吉という作家がいなかつたら、恐らくこの華やかな女の雑誌は、世に出はしなかつたろう。

同様に、『婦人戦線』も、決して高群逸枝だけで出発したのではない。夫の橋本憲三は、表面的にこそその名を現わしていないが、強烈な無政府主義者であり、平凡社社長下中彌三郎とは、形影の間柄であつた。当然出版企画の方にも長けていたし、頭腦の傑れた人であるばかりでなく、珍しいフェミニス

有名な婦人運動家の猛者、塚真柄の、水もしたたる高島田姿である。この純日本の美人が、男性の聴衆を眼下に見て、熱弁をふるつたのは今も一つの語りぐさとなつていっている。

さてある日、詩人で『解放劇場』で活躍していた局清が、フランスの劇作家ミルボオの『悪指導者』を上演するに際し、宮山房子も一役受け持った——と、実はこの間七、八年ぶりで私が呼び出しをかけた時、彼女は告白した。昔ながらの早口の低い声で。

——その時の写真、あ、持つてくりやよかつた。まだ持つてるわよ。芝田村町の飛行館でやつたんだけど、その前の築地小劇場の「ボストン」みたいに成功しなくてね。会場費も払えないの。局がね(彼女は男友達のこと、は、年長者でない限り決してさんをつけない)言ひ出したわ。芝居が終つたら、なんでもいいから裏梯子使つて逃げちまえて。あ、たし、芝居の衣裳を素早く抱えこんで逃げたのなんの：…あ、局清おぼえてるでしょ、ホラ、ジュノスケ(筆者注 後の菊岡久利、高木寿之介は当時文壇人たちからもひどく愛されている)と双壁の美少年でさ。上落合の萬昌院(林美美子の住居近く、そこに美美子の墓もあ

トでもあつた。この人が如何に妻、高群逸枝に献身的であつたか、高群家に集まつた私たちの誰一人、羨望と讃嘆を深くしない者はなかつた。この蔭の力あつてこそ『婦人戦線』は出発出来た。発刊後も、編集会議には必ず参加し、鋭い意見をのべた。雑誌経営面の苦闘も、この夫の肩にかかつていた。

私の耳に、今も橋本憲三氏が夫人を呼ぶ時の優しい声が残っている。

「逸枝さんよ、これどうするかね」

そして台所仕事はすべて、夫の担当であつた。そして思うままに妻に書かせた。「大日本女性史」など彼の、愛妻への献身は妻の死後も続き、彼の生涯は高群逸枝という、一人の婦人運動家であり詩人である稀有な女性に、あますところなく献げ尽されるのである。

でも当時、逸枝さんは笑いながら言った。

——ああなるまでには、色々ありましたよ。

私は憤つて三度家出しました。家出するたんびにいい亭主になつて、現在のような亭主が完成したわけです。

女が大きな仕事をする時、やはりそこに男性の協力が必要なのであるうか。現代の女性のみなさんは、どう思われるだろう。